Meet The New Poland

Warszawa, Gdańsk, Łódź, Kraków, Oświęcim

photography= YAYOI ARIMOTO text= MAKI TSUGA(TRANSIT)

あたらしいポーランド

"Heart of Europe"と呼ばれ、欧州の真ん中に立つポーランド。
西と東の狭間には、どんな人たちが暮らし、どんな世界を見ているのだろう？
大戦、社会主義、民主化の先にある、ポーランドの今に出合う。

ヴィスワ川脇にあるワルシャワ大学の図書館。敷地内にある公園や屋上庭園は、学生だけでなく市民も自由に利用できる。

東京から直行便で首都ワルシャワに飛ぶ。ワルシャワを拠点に、港湾都市グダンスクへはバスで約6時間、映画の街ウッチへはバスで約1時間かけて向かう。南部の古都クラクフへは飛行機で1時間ほど。そこから電車でオシフィエンチムへ。ポーランドを北から南へ周った10日間ほどの旅。

Warszawa

ワルシャワ

1 | 2
3 | 4
5 | 6

1／ワルシャワの歴史地区。ナチス軍によって廃墟となったが、戦時中にワルシャワ工科大学の建築学科の学生が記録したスケッチや古い絵画をもとに、昔の姿で再建された。世界遺産に登録されている。　2／赤と黄色のワルシャワカラーのバス。街中は、電車、トラム、地下鉄、ウーバーも走り、移動はスムース。　3／5年に一度、ショパン国際ピアノコンクールの本選会場（国立ワルシャワ・フィルハーモニーホール）。この日は、リトアニアのピアニスト夫妻、Anna GeniusheneとLukas Geniušasによる演奏が行われた。 4／1200人ほど収容するコンサート会場は、緊張感があるものの、どこかアットホームな雰囲気。ヒールを履いてワンピースをさらりと着た女の子や、ジャケットを羽織って紳士然とした男性など、日常から少しだけ背伸びしたような姿が素敵。　5／100年以上もつづくハラ・ミロフスカの市場。野菜、肉、パン、お菓子、ハチミツが並び、市民に混ざって買い物を愉しめる。　6／国内最長のヴィスワ川。散歩やジョギングがしやすいように道が整備され、シャワールームまで完備。

7 | 8

7／ワルシャワ観光局で働くカシア。仕事の合間を縫って、Tシャツ＆ハーフパンツ姿でレストランに颯爽と登場。ランチをしながら街のおすすめを教えてくれた。　8／ワルシャワ蜂起で少年兵として戦ったHenrykさん。ナチス軍に捕まってザクセン・ハウゼン強制収容所に送還されていたという。

ワルシャワはあたらしい？

8月末のワルシャワはよく晴れて、太陽の光が大気中の乾いた空気を一瞬で貫いて、街の人や木々をスポットライトのように照らしていた。

お手製のお菓子を持ち寄ってガールズトークに花を咲かせる高校生、裸足になってキャッチボールする子ども、屋上庭園を散策する老夫婦……。ワルシャワ観光局で働くカシアと知り合って、街のとっておきの場所を聞いたときに、このワルシャワ大学図書館の緑の広場を教えてもらったのだ。青銅色の図書館は蔦で飲み込まれて、すっかり地上の楽園と化していた。

「少し前までは、留学や仕事でイギリスやアメリカに出ていく若者も多かったけど、最近は国内の賃金が上がってきているからポーランドに戻って来る人も多いの」とうれしそうに話すカシア。そんな彼女の言葉どおり、ワルシャワの街を歩いていて感じたのは、成長期の子どものような若々しさだった。街なかを流れるヴィスワ川沿いは美しく整備され、ランニングや犬の散歩を楽しむ人が行き交いヘルシームード。地下を走るメトロはどれも車両が新しくて駅もぴかぴか。それもそのはず、南北を結ぶ1号線は1995年に、東西方向の2号線は2015年に開通したばかり。~~失業率も2%台と、欧州では最低レベルだ。~~

スタレミアストもぜひ立ち寄って、とカシアは旧市街の名前を告げた。旧市街といっても、ワルシャワのそれはあたらしい。第二次世界大戦中のナチス軍の攻撃で一度焼け野原になったのを、国民が瓦礫を使って昔の街並みをすっかり再建させたのだ。当時の被害は凄まじく、ワルシャワの8割の建物が破壊され、~~街に残っていた人の数は戦前の6%にも満たなかったという。~~

今のポーランドを知りたいと思うのと同時に、昔のことも気になってくる。ワルシャワで旅行業を営む小見岳史さんにそんな話をしていると、ワルシャワ蜂起博物館に連れて行ってくれた。ナチス軍と戦った人たちが戦争体験を語っているというのだ。戦後80年がたつ今、元兵士だとしたら100歳を超えるんじゃないかと思っていたけれど、そうではなかった。彼らは90代で、戦争当時は

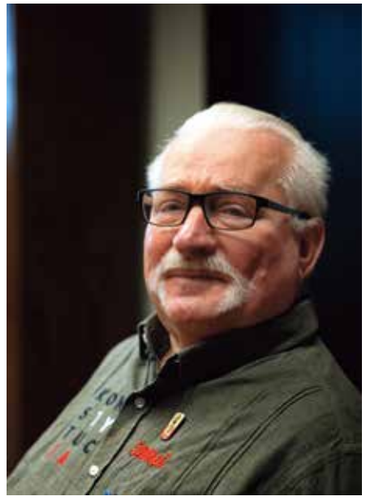
推定20万人の市民が
亡くなったといわれている。

2000年代のGDP成長率はEU内でも群を抜く。

1

Gdańsk

グダンスク



2

3

1／グダンスクの近くにある港町ソポト。バルト海の波が打ち寄せるビーチでは白鳥が羽を休めていた。　2／グダンスク中央駅の地下通路で。ゴシック様式やバロック様式の教会、コミュニスト建築など、いろんな時代の地層を感じる。　3／1989年のポーランド民主化の原動力となったレフ・ヴァウェンサさん。1983年にノーベル平和賞を受賞。1990年から5年間ポーランド大統領も務めた。

10代だったという。1944年に起きたワルシャワ蜂起では、市街地が戦場になったこともあって、子どもから大人まで一般市民が自分の街や家族を守るために戦ったという。

「戦前のワルシャワは、それはもう美しかった。それをナチス軍が火炎放射器で破壊して、その後にやってきたソ連軍が略奪していった。あとには何も残っていなかった」。元少年兵のおじいさんが、透き通る水色の目でこちらを真っ直ぐに見つめる。

博物館を後にして、地下鉄に乗り込む。体は一気に21世紀に引き戻されたものの、さっきのおじいさんのことが頭から離れないでいた。ポーランド人の妻がいる小見さんは、この国の人にとってワルシャワ蜂起は美談として片付けられないのだと教えてくれた。蜂起を促して応戦する素振りを見せながら、結局、その前線に現れなかったソ連軍。そんな状況下、ろくな軍備もなしにナチス軍に抗いつづけたことは、果たして正しかったのか？子どもを兵士として扱ったことは？同じく蜂起を呼びかけたポーランド政府がすでにロンドンに亡命していたことは？西と東の間に立ってきた人たちの途方もなさに、ただ打ちのめされることしかできなかった。

グダンスクで民主化がはじまった理由。

目の前のバルト海が、暗く青い身をよじらせている。波打ち際まで歩いていって、おそるおそる手を伸ばす。海の向こう岸にあるロシア、ドイツ、スウェーデンといった国々の輪郭に触れるような気がして、どきりとする。冷たい。けれど、9月になったばかりのその海辺では、水着姿の子どもたちが波と戯れていた。

グダンスクはヴィスワ川がバルト海に注ぎだす河口に位置していて、古くから交通の要衝として栄えてきた。13世紀にバルト海一帯の都市とハンザ同盟を結ぶと、ポーランド人、ドイツ人、オランダ人、ユダヤ人……あらゆる人が商いをする貿易都市になる。今もその自由な気風は健在で、国内外の企業が肩を並べる商業都市であり、バルト海目当てに人が集うビーチリゾートでもある。そんなグダンスクには、世界を大きく揺るがした

4

5

6

4／19世紀から紡績業で栄えたウッチ。一時、紡績業が傾いて労働者から失業者の街になったことも。レンガ造りの工場や労働者の集合住宅は貧しさの象徴だったが、今ではリノベーションして、ショッピングモールやレストラン、住居になって賑わいを取り戻している。　5／ウッチ映画大学のミレニア・フィードラー学長。名監督アンジェイ・ワイダの映画の編集も務めるなど、長年、そして今でも映画に携わっている。　6／ウッチ映画大学の学生たちの撮影現場へ。団地の一部屋を借りてカメラをまわす。

Łódź

ウッチ

“はじまり”が2度ある。

1つ目は、1939年9月1日のこと。早朝、グダンスクにあるヴェステルプラッテの岬にナチス軍が砲弾を打ち込み、ポーランドに侵攻。ここから第二次世界大戦がはじまる。2つ目は、1980年に生まれた「連帯（Solidarność）」。戦後、ソ連の衛星国となって社会主義をとっていたポーランド政府を相手に、グダンスク発の労働組合「連帯」が政府の食料価格引き上げなどに抗議の声を上げる。このうねりが次第に大きくなり、1989年にポーランドは民主化を果たし、当時の東欧の社会主義諸国にも波及していった。

その連帯を率いたのが、造船所で電気工として働いていたレフ・ヴァウェンサ。今もグダンスクに住んでいると聞いて、彼のオフィスを訪ねることになった。部屋に入ると大きな机の前に白ひげをたくわえたその人がいた。挨拶が終わるか終わらないかのうちに、ヴァウェンサさんは話しはじめた。

「共産主義と資本主義、その両方をポーランドは経験してきたが、どちらにも限界がある。それは歴史が証明している。たしかにポーランドは位置が悪かったかもしれない。ロシアとドイツに挟まれているし、他国に分割されて地図からポーランドが消滅した時代もあった」

一介の労働者から得意の弁で人も時代も動かしてきた姿は健在で、演説さながらだ。

「ですが、今は対話の時代です。欧州の真ん中にいることを活かすときが来た。相変わらず自分のことだけ考えている国ばかりだけれど、それでは何も変わらない。今は個々の国だけでは解決できない問題も多い。課題を持ち寄って一緒に解決していかないといけない」

ポーランドにいると世界史の教科書の世界が地続きにあるようで、目眩に襲われる。ワルシャワで元少年兵の老人と話したり、ヴァウェンサ元議長を目の前にしたり、それもこれもポーランドの市井の人びとが、皆、年齢も立場も関係なく不条理の荒波に揉まれてきたからなのだろう。ヴァウェンサさんが連帯を率いて当時の社会主義政府に恐れられたのも、彼が若干の36、37歳のときのこと。なんという国、なんという人たちなんだろう。

弱冠

Kraków

クラクフ

1 2 3 4 5 6

1／共産主義時代の1967年に建てられた映画館〈KIJÓW Centrum〉。800人を収容するシアタールームから数名程度の上映室まであり、大作からアート系映画まで観ることができる。
2／クラクフのカジミェシュ地区にあるレム・シナゴーグ前で。 3・4・5／カジミェシュ地区はレストランやバーが点在。ズブロッカをカクテルのように楽しむショットバー、古いガレージや修道院を改装したバーなど散策が楽しい。
6／夜の路地で立ち往生していたポルスキ・フィアット126P。1960年代から国民車として愛されていた車で、このサイズで4人乗り！

映画が生まれる街、ウッチ。

ワルシャワに戻り、1時間ほどバスに乗ってウッチへ向かう。首都からほど近いベッドタウンで、実は映画の街でもある。ロマン・ポランスキー、イエジー・スコリモフスキ、クシシュトフ・キェシロフスキ、アンジェイ・ワイダ……錚々たる映画人を輩出したウッチ映画大学があるのだ。いくつかのポーランド映画を観たけれど、どれも観客を見つめ返してくるような乾いた視点と、脳裏の奥底に碇をおろしてじっと居座るような存在感がある。こうした映画が生まれてくる場所を見てみたかったのだ。

「映画は時代を反映するものです。そして人と芸術を結びつけるものです。ポーランド映画はその傾向がとくに強いかもしれません。ドキュメンタリーも劇映画も、いずれも現実をどのように見ているかが表れます。だから私たちの大学に入ると学生たちはその両方を学ぶことになります」。映画大学を訪ねると、学長のミレニア・フィードラーさんがそう話してくれた。彼女は長年映画の編集を務めてきた人で、現在も映画製作をしている。そんなミレニアさんにとっても、学生たちと対峙するのはいい刺激のようだ。

「世代ごとに、不安や、緊張感や、おもしろいと思う感性は違うものです。ある意味、今の世代は大変かもしれない。私たちのように共産主義時代を生きた世代は、検閲が通るかどうかという難しさはあったけど、反抗する対象がシンプルだった。民主化以降は、わかりやすい敵がいない。一人ひとり見ている世界も違います。その先に彼らが何を生むのか、私はそれを楽しみにしているんです。あたらしいものを知りたいという渇望、それがあたらしいものを生むから」。少女のようにメガネの奥の瞳を輝かせる。

ポーランド映画の話をする流れで、ロバが脱走するロードムービー『EO イーオー』~~になった~~の話になった。「その映画を撮ったとき、スコリモフスキ監督は80代だったけど、彼の場合は永遠の反抗期かもしれないわね」とミレニアさんがいたずらっぽく微笑んだ。映画の最初から終わりまでひと言も発さず、人間社会をじっと見つめ、ここでもない、あそこ

Oświęcim

オシフィエンチム

1

2

3

1・2／〈アウシュヴィッツ=ビルナケウ強制収容所〉。第一収容所のアウシュヴィッツと第二収容所のビルナケウ、2つのエリアに分かれている。ここに、ポーランド、ハンガリー、フランス、オランダ、ギリシア、チェコ、スロバキア、イタリア、ノルウェーなど、各地から110万ものユダヤの人びとが集められた。さらにポーランド人、ロマ、ソ連軍なども捉えられ、収容者の数はのべ130万人に及んだ。そのうち推定110万人が殺害された。1979年に世界遺産に登録される。　3／収容者が暮らしていた部屋。小さな暖炉はあるものの、寒く、狭く、食事もろくに与えられず、多くのものが病死していった。

でもないと、自分にとってのユートピアを探し歩く（ようにみえる）ロバのイーオー。彼が行きつく先は――。ポーランドの作品は、たしかに現実に対する反骨心からやってくるのかもしれない。

ヒューマンサイズのクラクフ。

「クラクフに乾杯！」バーカウンターで隣り合わせたブロンドヘアのお姉さん2人組とグラスを交わす。ズブロッカにタバスコとペッパーを少々。ショットグラスに並々入ったそれをぐいっと飲み干す。ワルシャワからやってきた彼女たちは、「私たちの街もいいけど、やっぱりクラクフは美しい」と恍惚としている。客がくるくると入れ替わって、今度はイギリスからやってきた男の子たちが座った。物価が安いから学生でも遊びに来やすいのだとはしゃぐ。夜のクラクフには気分を高揚させる何かがあるようで、路地に人が溢れかえっている。

第二次世界大戦中にナチス軍の拠点が置かれたこともあり、古い街並みが破壊されずに残っている。とくにカジミェシュ地区は曲がりくねった路地がつづき、ドライブには向かないかもしれないけれど、人の歩幅で散策するのにちょうどいい。数歩進むごとにいいバーやレストランに出くわす。もともとユダヤ人街だったこともあり、今もいくつかのシナゴーグが残る。日中にシナゴーグの前を通りかかると、黒ずくめの男性たちが教会から大勢出てくるところだった。話しかけてみると、この街に住んでいるわけではなくて、大事な集会のためにアメリカやイスラエルといった国々からやって来たのだという。

クラクフは第二次世界大戦前には欧州最大のユダヤコミュニティがあった場所でもある。習慣の違いなどから、キリスト教徒が多数を占めるヨーロッパで差別を受けていたユダヤの人びと。そんな彼らに権利と自由を与えて保護したのが、中世ポーランドの王、カジミェシュ 3世だった。大戦前には、街の人口の4分の1にあたる6万人ものユダヤ人が暮らしていたというが、現在では数百人ほどしかいない。映画『シンドラーのリスト』でも描かれているように、この街に暮らしていた多くのユダヤ人がゲットーに押し込められ、強制収容所に送られて亡くなってしまったのだ。

ドイツ語の名で知られる、その街へ。

クラクフから電車で1時間半かけてオシフィエンチムへ向かう。ドイツ語名でアウシュヴィッツと呼ばれるその街を目指して、麦畑と森が広がる穏やかな平野を列車が突き進む。

アウシュヴィッツ=ビルケナウ博物館に到着してみると、テーマパークのように人でごった返している。欧州の修学旅行生も多い。15分刻みで英語、ポーランド語、ドイツ語、ロシア語、日本語など十数各国語のツアーが組まれていて、それぞれ1名のガイドと十数名ほどのチームで動く。予約していた時間になって、英語ガイドの後につづいた。

シャトルバスに乗って、2.5kmほど先にある

収容所を案内してくれたツアーガイドの女性。ガイドをはじめた理由を聞くと、オシフィエンチム生まれで、祖父がここに収容されていたからだと教えてくれた。

博物館はアウシュヴィッツとビルケナウの2つの収容所を擁していて、アウシュヴィッツのエリアは、収容所の各部屋が展示室になっている。ガラスの向こう側には、収容者の靴、カバン、メガネが無数に積み上げられている。なかでもひと際異様な空気を放っているのが、三つ編みの髪の束。その重さはなんと2t。収容者の髪の毛を刈り取って、生地を織っていたというのだ……。廊下には、坊主頭の収容者の顔写真が張り出されていて、氏名、出身地、職業、3つの日付（誕生日、入所日、死亡日）が書かれている。教師、貿易商、大工、美容師、学生……その肩書きを見ているだけで、自分もそこに並んでいるような気分になってくる。正直、人気の多さに助けられたところがある。そうでないと死の気配や人間の憎悪に参ってしまいそうだった。

バスに乗って2kmほど先にあるビルケナウ収容所へ向かう。そこにはまた別の景色が広がっていた。線路の両脇に体育館のような平屋が無数に並んでいる。囚人棟の数は300以上、およそ10万人の収容力があったという。本気でユダヤやスラブの人を根絶やしにしようとしていたのだな、と言葉を失う光景だった。

アウシュヴィッツ=ビルケナウ絶滅収容所では、110万人以上のユダヤ人、そしてポーランド人、ロマ、ソ連兵、同性愛者、身体や精神に障がいがあるとされた人びとが虐殺されたという。ナチスによって欧州各国に強制収容所がつくられたが、ポーランドには主にユダヤの人びとを殺すことを目的とした絶滅収容所が6カ所もつくられた。それはポーランドが欧州の中心にあってユダヤの人びとを移送しやすいという理由からだった。いかに効率よく集め、殺すか。数の世界がそこにあった。

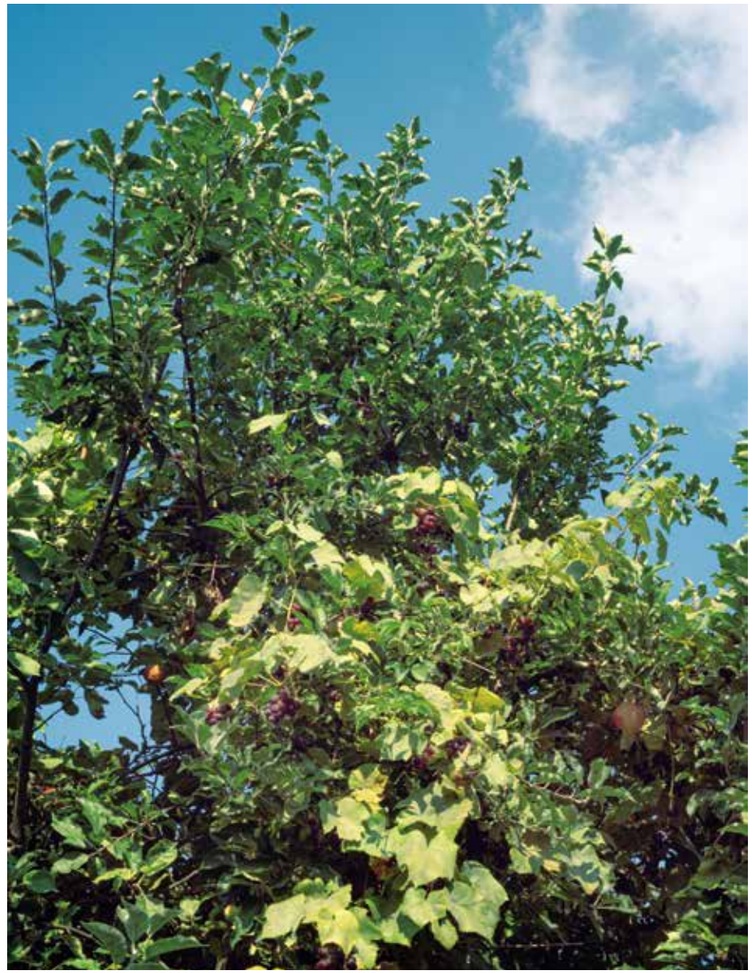
平らかな暮らしのあるところ。

再び、ワルシャワに戻る。以前、日本のポーランド大使館で働いていたエリザさんと食事をすることになっていたのだ。他愛もない話から、ふとウクライナの話になった。彼女は2022年にロシアのウクライナ侵攻がはじまると、すぐにポーランドとウクライナの国境に車を走らせたという。

「いてもたってもいられなくて、車に食料を詰めて走りました。国境の駅に着くと、たくさんのウクライナの人たちがいて、見ず知らずのウクライナ一家に声をかけて自分の家に招きました」。そして彼らの新たな拠点が見つかるまで、一緒に暮らしていたのだという。突如はじまったロシアの

1／グダンスクのウクライナ料理店で働いていた2人は、ロシアの侵攻があってからポーランドへ。言葉が似ているから馴染みやすいのだと教えてくれた。　2／ワルシャワ大学の公園でお手製のお菓子を広げてピクニックしていた女子高校生。　3／ワルシャワにある〈POLINポーランド・ユダヤ人歴史博物館〉。小学生たちが社会科見学に来ていた。　4／キュウリとハーブの冷製スープ。ポーランドの食卓には、ジュレックにバルシチと、スープは外せない存在。　5／クラクフ・カジミェシュ地区にあるノビ広場は、ソーセージ、ザピエカンカ（ポーランド版ピザ）など、おいしい屋台がずらり。　6／ニョッキのようにもちっとしたジャガイモのクルスキ・シロンスキェ。ビーツのソースでいただく。シンプルな味付けでほっとする味が多かったポーランド料理。　7／移動中の車窓から。こうした平原の麦畑と牧草地がどこまでも広がっている。

8／ソポトに暮らすデザイナーのモニカさん。手前の照明は彼女がデザインしたもの。海が近い暮らしが気に入っているという。　9／ポーランドで旅行会社と通訳業を営む小見岳史さんとアンナさん夫妻。自宅に招待してくれて、庭でひとときグラスを交わした。　10／ワルシャワで出会ったテオくん。ユダヤ人スクールで講師をしていて、子どもたちにユダヤの文化を教えているけれど、テオくん自身はシナゴーグには毎週通うわけではないという。ユダヤのなかにもいろんな文化の守り方がある。
11／以前、駐日ポーランド大使館で働いていたエリザさん。ロシアがウクライナ侵攻をはじめたときには、ウクライナ難民を自宅で保護していた。そうした自主的な行動を起こしたポーランド人たちがたくさんいたという。
12／時折、街で見かけるケバブショップ。ポーランドはウクライナ難民の受け入れがもっとも多い国のひとつだが、一方でイスラーム系の人びとを見かけることは少ない。　13／ワルシャワの文化科学宮殿の下にある〈Bar Studio〉で。この後、女の子たちに誘われDJの曲に合わせてその場でダンスをすることに……。



1 | 2

1／小見さん夫妻の庭になっていたリンゴとブドウ。社会主義時代は食糧が配給制だったため、食べ物を得るための工夫だったそう。　2／ソ連が建造した「スターリンの置き土産」こと、〈文化科学宮殿〉。現在は劇場、博物館、飲食店やオフィスが入っていて、夜は若者たちがバーに集い音楽に体を揺らしていた。

侵攻は、今も終わりがみえない。一時的な避難のつもりでいたウクライナの人びとのなかには、地元の戦況が落ち着いて母国に戻る人もいれば、帰る家を失ってポーランドや他国で生きる覚悟を決めて、仕事を見つけ、学校へ通い、異国で日常を取り戻そうとしている人たちもいる。

ワルシャワを発つ日に、プラガ地区にあるガイドの小見さんの自宅を訪ねた。その家は妻アンナさんの祖父母が建てたもので、第二次世界大戦で壊れた瓦礫のレンガも使っているという。「戦後は物資がなかったからなんでも使ったそうです。社会主義の時代になっても食料は十分になかったから、庭の畑で野菜を育てて果樹を植えたりしてね」とアンナさん。今でも庭にはリンゴの木がたくさん植わっていて、ちょうど実が赤くなろうとしているところだった。

社会主義下のワルシャワで青春時代を過ごしたアンナさんは、学校で日本語を学び、日本に留学する機会を得て小見さんと出合った。数年後、スペインで働いていた小見さんに会うために、アンナさんはポーランドからスペインへ行くことに。共産圏ではない国を行き来するのは大変なことで、一歩間違えれば強制送還されるような場面もあったという。

「列車で国境を越えようとしたときに警察がやってきたの。私のパスポートでは共産圏を出られなかったんだけど、お酒で泥酔したふりをしてどうにかやりすごしたわ」と豪快に笑うアンナさん。そして今度は小見さんがアンナさんと結婚するためにポーランドにやってくる。ただ籍を入れたものの、外国人の滞在期間の制限が解除されないという問題に直面。しかし偶然ポーランドのドラマに小見さんがキャスティングされて、その監督が役所に掛け合って滞在できるようにしてくれたのだという。どうにかなるものだねと二人は昔話を笑う。ドラマみたいな話だ。

「体制じゃなくて、結局は人だと思う」とアンナさん。周縁の国々に裏切られてきた過去があっても、ポーランドの人たちは苦境にあったからこそ、困っている人たちを放ってはおけない。判断を、他者に、国家国に、譲らない。平らかなポーランドを歩いて出合ったのは、同じ目線に立ってじっと見つめ返してくる人の眼差しだった。T